

開花：10月29日には多数の花をつけており、開花ステージの異なる花を撮影することができたので、雄性先熟の様子を確認した。雄性期をはっきりさせたいと思い、花粉を放出している状態を探したが確認できなかった。そのため、図5a, bのタイトルを「ツルギキョウの雄性期？(あるいは雌性期?)における花の状態の観察」とした。なお、「日本の野生植物」(佐竹ほか1981)に記載された「葯は長楕円形で花柱を取り巻く」という記述の状態は確認された。

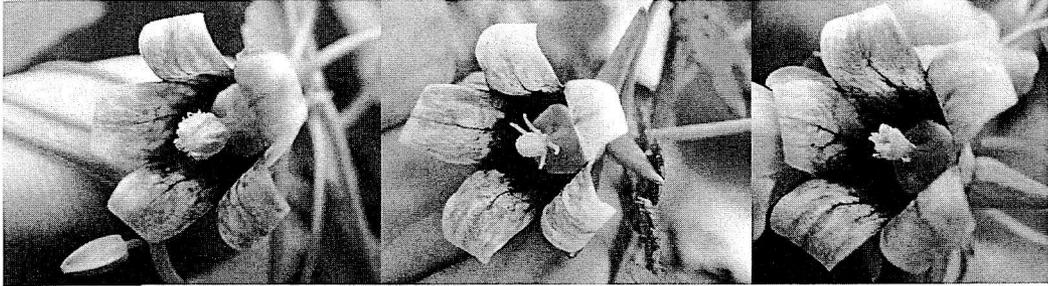


図5a ツルギキョウの雄性期?における花の状態の観察

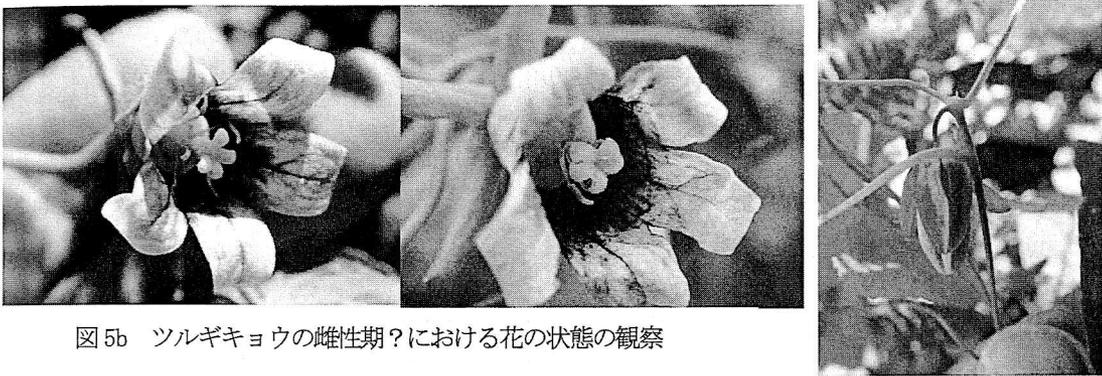


図5b ツルギキョウの雌性期?における花の状態の観察

(葉序と花柄)

佐竹ほか(1981)には、「葉は互生または対生し」と記載されているが、2本の葉柄が完全に対生している状態はみつからなかった。葉柄はわずかにずれて互生となっており、上側の葉に対生して花柄が1個ついていた(図6)。これは「(花は)葉に対生して下垂する」という記載通りである。ほぼすべての上部の葉に対して花がついているので大雑把にいえば花数=葉数/2と言えそうである。

図6 ツルギキョウの葉序

3 今後の課題

ツルギキョウの現況を確認のため、確かな雄性期を撮影しようと思い多数の花で葯の花粉放出の状態を探したが見つからなかった。探し方が不十分である可能性もあるが、雄性不稔の可能性もある。ツルギキョウは雄性先熟に加えて、多数の雄性不稔の花を咲かせることによって自家受粉を防いでいるのかもしれないと感じた。過度に雄性不稔の花を咲かせてしまうと自滅する可能性もあり、ツルギキョウの花粉形成・放出については興味深い重要な現象なので今後再調査が必要と思われる。

また、自生地の池の堤は改修済みで自然植生はほとんど見られないが、流入部は、自然度の高い場所が残っており未長く保全されることを望む。同池は洲本市ため池ハザードマップ水系の最上部に位置しており、今後より強固な防災工事がなされる可能性もあり、兵庫県として本種の保全を真剣に考える必要がある。

B地点の自生地は、ハチクが枯死した跡に生じたギャップの中で、有利な光条件が生じて旺盛な生育をしていると思われる。今後、中高木の侵入・成長に伴って暗くなっていくと植生が遷移し、個体数の大幅な減少が懸念される。定期的な観察が必要と思われる。

<証拠標本>洲本市 A 地点：T. Kobayashi & S. Ikushima 59891 (2023. 9. 27), 洲本市 B 地点：T. Kobayashi & S. Ikushima 59892 (2023. 9. 27) (HYO)